

主題の認可とハ句の命題分析

藏藤健雄（立命館大学）

ハ句の主題解釈と生起位置には密接な関係があるが、主題の「ハ」自体が主題提示機能を持っているかどうかは自明ではない。本発表では、ハ句の統語的認可と主題解釈は異なる操作であると主張する。具体的には、「敵だと思った奴が味方だったらそいつはたいていラスボスにやられてしまう」（ウェブ検索例）のような文にみられる、束縛解釈を受ける「そいつは」は主題ではないということを指摘し、このようなハ句は個体変項から $x=y$ のような命題的意味へタイプ変換され、先行する条件節に動的に連結されて解釈されるという分析を提案する。本分析では主題文は常に条件文の形式になるため、主題提示解釈は条件文／量化文の文脈更新の仕様から導出される。さらに本提案により日本語量化副詞のハ句指向性が説明されることを示す。

ジャンル・テキストとその要素としての構文タイプ
—構造と要素の相互作用—

志波彩子（名古屋大学）

本研究は、繰り返される使用により抽象化・一般化された構造のパターンとしての構文を言語の単位として認めた上で、要素と構文（構造）との間にダイナミックな相互作用があると考えます。両者の相互作用は様々なレベルにあるが、語と文の間はもちろん、構文とテキストの間にも見られる。本発表では文をテキストの部分＝要素と考え、要素としての構文とテキスト構造との相互作用について議論する。例えば、存在様態構文と呼ばれる「窓辺に花が置いてある」のような構文は典型的に小説の地の文の場面描写で、ある一定の連文構造で用いられることが多い。また、報道文ジャンルに圧倒的多数で現れる、受身構文の一種である催行構文（「投票が行われる」）は、動作主背景化という機能によりテキストの客観性に貢献していると考えられるが、一方で、スポーツ記事の中で逸脱的な「は」の使用を見せることがあり、これはテキストジャンルの影響であることを議論する。

否定文脈に用いる「何が／何の」の展開

深津周太（静岡大学）

中世以降、「何＋主格助詞ガ／ノ」が、「賢ナラハ誅シテハナニカヨカラウ／公方カラヲカル、都尉カ何ノ其様ニハアラウソ」（いずれも史記抄）のように反語表現に利用されることが知られる。反語を広く否定の表現と見れば、これらは否定文脈に用いられた「何が／何の」として把握される。本発表ではまず、特に近世期におけるこれらの表現の展開を概観する。反語用法としての「何が／何の」に共通する変化として注目されるのは、明示的な否定形式と共起する用法を新たに生み出す点である。これを反語用法が孕む語用論的意味としての“否定”が前面化した否定強調用法とみなし、その上で、①「何が」の当該二用法が衰退・縮小の途を辿ること、②対照的に勢力を増幅させる「何の」が近世後期以降に否定応答文脈（発話頭）での使用に偏っていくことを中心に論じる。